

中学校「総合的な学習の時間」を活性化させる 校長及びミドルリーダー教員の役割

岩 崎 保 之
(教育学科養護・福祉教育学専攻)

本研究は、中学校「総合的な学習の時間」を学校全体で推進した校長とミドルリーダークラスの教員にインタビューし、同学習を活性化させるために校長らが担った役割を明らかにすることを目的とした。X県にある公立中学校の校長5人とミドルリーダークラスの教員5人にインタビューした逐語録から、インタビュアーの発話を除いたテキスト—校長1,373文(605段落)、ミドルリーダークラスの教員1,306文(665段落)—を対象として、計算テキスト分析を行った。その結果、校長は、方針の提示、進捗状況の管理、研究指導、地域との関係構築、取組の組織化、計画の立案の6つが役割として抽出された。また、ミドルリーダー教員は、地域との連携・協働、総合的学習の実践、同僚教員の啓発、合意形成・調整、計画の立案の5つが役割として抽出された。総合的学習を学校全体で推進するに当たっては、校長もミドルリーダー教員も地域との関係構築や連携・協働に尽力するとともに、校長の示した方針に基づいて関係する教員と協議しながら同学習の計画を明確化していた。

キーワード：総合的な学習の時間、活性化、計量テキスト分析、地域、計画

1. 目的

中学校では現在、2021年度から完全実施される新しい学習指導要領の移行措置に基づいて、新たな「総合的な学習の時間」(以下「総合的学習」と略記)をスタートさせている。

これまでの総合的学習については、その成果を肯定的に評価する指摘がある一方で、実践上の課題や問題状況も指摘されている。

学習指導要領の改訂を答申した2016年12月の中央教育審議会答申においては、「学校により差がある」とする総合的学習の課題を2つ指摘している。1つは各学校で育成を目指す「資質・能力」の設定であり、もう1つは総合的学習と各教科等との関わらせ方である。

また、Y市の公立中学校で組織する「総合的な学習の時間研究会」の会長を務めた中野(2019)は、会員校の取組状況について「少しずつ改善が見られたものの日進月歩という印象

は否めなかった」と述懐している。そして、今後に必要な取組として中野は、「総合的な学習の時間という学習領域についての正しい理解に基づく校長のリーダーシップ」「担当者による強力なコーディネート」「効果的な事例の情報提供やコーディネートする役割を果たす人材の育成」の3点を指摘し、教職員の意識改革と行政等による学校支援の必要性を述べている。

中央教育審議会や中野による指摘は、総合的学習を学校としてどのように教育課程に位置付け、どのように組織体制を整備するかという論点を提起している。

新たな総合的学習がスタートした今のタイミングにおいて、そうした論点に各学校が対応するための取組モデルを開発することは、同学習を推進していく上で意義あることである。

そこで、本研究では、総合的学習を学校全体で推進してきた中学校の校長及びミドルリー

ダーククラスの教員にアプローチし、同学習を活性化させるために担った役割とそこでの具体的な取組を明らかにする。

なお、新たな総合的な学習は従前よりも探究的な活動が強調され、学習指導要領において目標や内容の取扱いなどが変更されている。しかしながら、新旧2つの「総合」を担当する教員は同じであることから、本研究では従前の総合的な学習を活性化させた取組が新たな総合的な学習にも適用できるものとして考察を進める。

2. 方法

(1) 用語の操作的定義

「活性化」するとは、文部科学省（2017）において学習指導要領を解説する中で述べている「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」を学校全体で推進している状態とする。

また、「ミドルリーダー教員」とは、校務分掌で総合的な学習を推進する部や委員会等の主任を務めている／務めた教員とする。

(2) データの収集

ア. 概要

X県にある公立中学校の校長及びミドルリーダー教員を対象とした半構造化面接法によるインタビューを実施して、逐語録を作成した。

イ. 研究参加者の選定

X県にある公立中学校の校長及び教員の全員が加入している教育研究団体から、総合的な学習を学校全体で推進している中学校の校長及びミドルリーダー教員の紹介を受けた。そして、筆者の責任においてインタビューを依頼する校長及びミドルリーダー教員を5人ずつ選定した。

その際、X県内における行政区分、学校の立地や規模のバランスを考慮した。

ウ. インタビューの方法

研究参加者には事前にインタビューガイドを渡し、資料等の準備を依頼した。

インタビュー項目は、プロフィール、総合的な学習の意義と勤務校での取組状況、校長／ミドルリーダー教員としての役割や職務内容、成果と課題の認識であった。実際の調査では、それ

らの諸項目に準拠しつつ個別のケースに応じて適宜質問を行い、対話を深める形で実施した。

インタビューは、1人につき60分間程度、研究参加者の勤務先で個室を借りて実施した。研究参加者の承認を得た上で、インタビュアーである筆者と研究参加者との会話をICレコーダーに録音した。

インタビューを実施した期間は、2018年11月から同年12月であった。

エ. データの分析

ICレコーダーの音声記録を文字起こしした逐語録から研究参加者の発話のみを抜き出したテキストを、本研究で分析対象とするデータとした。

分析方法としては、テキストマイニングの方法の1つである計量テキスト分析を採用した。これは、「アンケート自由記述やインタビュー記録のようなテキスト型ないし文章型のデータを計量的に分析する方法」（樋口：2019）であり、社会科学において従前より行われてきている内容分析（content analysis）の考え方に依拠している。

実際の分析では、樋口（2014）が開発したフリーソフトウェアであるKH Coder（version 2.00f）を使用した。

KH Coderは、文章を単語ごとに分解してその出現頻度をカウントすることができるだけでなく、関連して使われている単語を距離として出力することもできるため、データの全体像を視覚的に把握できる。また、単語が使われている原文をソフトウェア上から確認することもできる。

オ. 倫理的配慮

インタビューを行った2018年度は筆者が当時所属していた新潟青陵大学の倫理審査委員会による承認（承認番号201804）を、分析を行った2019年度以降については京都女子大学の臨床研究倫理審査委員会による許可（許可番号2019-1）を得て実施した。

研究参加者には、インタビューに先立って本研究の概要と倫理的配慮事項を記した文書を手渡しして口頭で説明した後、同意書の提出をもつ

て同意を確認した。

3. 結果

(1) データの概要

ア. 研究参加者の属性

研究参加者の属性を表1・表2に示す。校長のうち1人は、校長職として1校目であった。ミドルリーダー教員は、インタビュー対象となった取組の初年度における教員経験年数が、平均24.6年 ($SD = 8.3$) であった。5人のうち1人は研究主任を、2人は学年主任を兼務していた。

表1 研究参加者の属性 (校長)

職位	学校の立地	学校規模	勤務校数
校長	住宅街	大	1校目
校長	郊外	中	4校目
校長	郊外	中	2校目
校長	住宅街	大	2校目
校長	郊外	小	3校目

表2 研究参加者の属性 (ミドルリーダー教員)

職位	学校の立地	学校規模	経験年数	主な校務分掌
教諭	郊外	中	9年目	学年主任・ 総合的学習主任
教諭	住宅街	大	33年目	総合的学習主任
教諭	郊外	中	24年目	研究主任・ 総合的学習主任
教諭	郊外	中	29年目	総合的学習主任
教諭	住宅街	大	28年目	学年主任・ 総合的学習主任

イ. テキストの「前処理」

テキストを校長及びミドルリーダー教員の2つに分けて「前処理」を行った。前処理とは、分析対象ファイル内の文章から語を切り出したり、その結果をデータベースとして整理したりする処理(樋口:2015)のことである。校長は1,373文(605段落)が、ミドルリーダー教員は1,306文(665段落)が抽出された。

次に、KH Coderに含まれている形態素解析ソフトウェア「茶筌」を用いて複合語を検出した。その結果、校長は711語が、ミドルリーダー教員は595語が検出された。

表記揺れや同義語などの統一を図った後、品詞を限定(名詞、サ変名詞、形容動詞、副詞可能、未知語、タグ、動詞、形容詞、副詞)したり、強制的に抽出する語を設定(校長508語、ミドルリーダー教員373語)したりしながら「前処理」を繰り返した結果、分析対象とするテキストは、最終的に校長が1,776語に、ミドルリーダー教員が1,521語に集約された。

(2) 探索的な分析

ア. 職位による頻出語の異同

校長及びミドルリーダー教員について、データ全体がどのような語によって特徴づけられるかを把握するために、出現頻度の多い順に150語を抽出した。

校長及びミドルリーダー教員を比較したところ、「地域」「思う」「言う」「話」「総合」「子どもたち」「総合」など91語が共通して出現していた。

その一方で、校長及びミドルリーダー教員それぞれにのみ頻出していた語については、次のように確認した。

校長は、「活性化」「進める」「関わる」など事象をポジティブに動かす行為を意味する語や、「校長」「教頭」「管理職」など学校内の職位に関する語が上位に多く見られた。

ミドルリーダー教員は、「総合的な学習の時間」「内容」「個人テーマ」など総合的学習の実践に関連する語や、「決める」「変える」「入れる」など職務上の行為を意味する語が上位に多く見られた。

職位の違いによる取組内容の違いが、発話における頻出語の違いとなって表れていた。

イ. クラスタ分析

共通する抽出語を含んだ発話の組合せにはどのようなものがあるかを把握するために、校長及びミドルリーダー教員それぞれについて、Ward法、Jaccardによるクラスタ分析を行った。集計単位は内容で発話を区切った「段落」とし、語の最小出現数は5とした。

段落の数の偏りを考慮したり、テキストで発話の内容を確認したりしながらクラスタ数を変更して分析を繰り返した結果、校長は8つの、

ミドルリーダー教員は6つのクラスターに併合された。

以下、クラスターの特徴語を「 」に、クラスターを構成する段落の数を（ ）に示す。

校長

- ①「乗っかる」「地域性」「機会」など(10)
- ②「地域」「経営方針」「地域連携」など(32)
- ③「企画」「KJ法」「作る」「自分」など(6)
- ④「総合」「研究」「ファシリテーション」など(187)
- ⑤「来る」「出る」「お年寄り」「関係」など(35)
- ⑥「校長」「教頭」「教務」「職員」など(18)
- ⑦「研究主任」「学年主任」「部会」など(36)
- ⑧「意味」「大事」「将来」「生き方」など(121)

ミドルリーダー教員

- ①「感じ」「地域コーディネーター」「実践」など(12)
- ②「体験」「活動」「発表」「学習」など(67)
- ③「指導計画」「教育計画」「時数」など(6)
- ④「地域」「総合」「ファシリテーション」「考える」など(123)
- ⑤「学年主任」「校長先生」「職員」「話」など(39)
- ⑥「研究主任」「総合担当」「会議」「各学年」「先生方」「変える」「話し合う」「お願い」など(208)

なお、クラスターに分類されなかった段落数は、校長が160(26.4%)、ミドルリーダー教員が210(31.6%)であった。

(3) 仮説検証的な分析

ア. 分析方法の概要

前述した3-(2)「探索的な分析」においては、抽出語の頻度と共起性に基づいてデータを分析し、全体としての特徴を把握した。

しかしながら、クラスターの中には段落数が少なかったり、特徴語だけでは内容が類推できなかったりするものが残された。また、出現する頻度としては高くなかった抽出語であっても、それを含む発話の中には、総合的な学習の活性化につながった内容を示しているものも見られた。こうしたことから、探索的な分析だけで結論を得ることは不十分であり、データ全体を効率的

に要約して整理する必要があると判断した。

そこで、探索的な分析で得られた頻出語やクラスターに準拠しつつ、総合的な学習を活性化させるための校長らの役割を仮説として設定し、テキスト全体を「コーディング」して仮説検証的に分析することにした。

コーディングとは、コード(本研究では総合的な学習を活性化させるための役割)に従って分類基準(コーディングルール)を作成し、それに基づいてデータを分類することである。

KH Coderによるコーディングは、「必ずしも頻度が高くなかった抽出語、あるいはそれを含む文書でも、分析の中に取り込」むことが可能になる(牛澤:2018)だけでなく、コードの共起関係を視覚的に探索できるメリットがある。

イ. 校長の役割と取組

A. 総合的な学習を活性化させるための役割

総合的な学習を活性化させるための校長の役割を7つ、仮説的にコードとして設定した。そして、各コードの特徴語の中から選択した抽出語を「or」で連結して、コーディングルールを作成した(表3)。

その際、クラスター分析において段落数が少なかった①と③については、次のように取り扱った(発話からの引用における……は中略を、()は注記を示す。抽出語には下線を付す。以下同じ)。

①については、「(自校で取り組んだ地域学は、小学校での地域学習の成果に)乗っかっていけるんだらうなと思います」「(総合的な学習で防災教育に取り組んだことは)とてもいい機会があったなと思いました」という発話があるように、総合的な学習の内容を示していた。これは、校長の「役割」とは異なることから、仮説として設定しないこととした。

③については、「(地域と)つながる企画作り(を校長がした)」「(地域住民を対象としたアンケートの)原案は(校長が)作り、そして集約し、それをああでもない、こうでもないとKJ法で(まとめた)」という発話があるように、総合的な学習の計画を校長自らが行ったことを示していた。これは、総合的な学習を活性化させる

表3 コーディングルール (校長)

コード	抽出語
方針の提示	地域, スタート, 前任, 決める, 基本的, 考える, 学習指導要領, 学校, 中学校, 校長, 地域連携, 年度, 経営方針, 年間, 課題, 中心, 評価, 書く
進捗状況の管理	部会, 褒める, 頑張る, 管理職, 一生懸命, 聞く, 認める, 部分, 学年主任, 含める, 自分たち, 研究主任, 上意下達, 配置, ステップアップ, 生徒指導, 役割, 確認
研究指導	総合, 進める, ファシリテーション, 教科, 研究, 話, 関わる, 先生方, 上げる, テーマ, 参会者, 意見, 授業, 変わる, 聞く, 考え, 便り, 校長室, 教員, 研究主任, アンケート, 引き継ぐ, 面白い
地域との関係構築	来る, 出る, 作る, お年寄り, 関係, 知る, お願い, 環境, 交渉, 特区, 協同, 協働, 寄附, ご縁, 整備, 新任, 講師, 後援会, 教具, 絡める, 本部, 熱心, 地域連携, 地域
取組の組織化	校長, 教頭, 管理職, ミドルリーダー, 細かい, 教諭, 年数, 与える, 命令, 行政, 連絡会, 教務室, 是非, 教員経験, 教務, 職員, 取り組み, 組織
計画の立案	集約, 原案, 計画, 作る, KJ法, KPT法, 企画, キャリア教育, 職場体験学習, 一緒, 入る, 自分

校長の「役割」として検証できる可能性があることから、仮説として残すことにした。

また、段落数としては121あった⑧については、「地域を学ぶってということは自分の将来を学ぶことなんだぞ、だからそれをとにかく大事にしていこう」「総合的な学習の時間の……意義については、自分の人生、生き方を考えるのに正にぴったりだなというふうに思っています」という発言があるように総合的な学習の意義に関する認識を示していた。これは、①と同様に校長の「役割」とは異なることから、仮説として設定しないこととした。

次に、コーディングする単位を「段落」とし、テキストを単純集計した結果を表4に示す。表中の「頻度」は抽出語が出現した段落数を、「%」は全段落におけるその割合を示している。

「方針の提示」が約4割、「進捗状況の管理」「研究指導」が3割近い頻度で出現していた。学校を経営する立場として求められる職務上の役割を、総合的な学習の活性化に向けた取組においても担っていた。

なお、いずれのコードにも該当しない「コード無し」の段落が、クラスター分析で分類されなかった段落を12.4%上回る結果となった。

表4 コードの集計結果 (校長)

コード	頻度	%
方針の提示	225	37.2
進捗状況の管理	166	27.4
研究指導	164	27.1
地域との関係構築	144	23.8
取組の組織化	88	14.6
計画の立案	87	14.4
コード無し	342	38.8

B. 総合的な学習を活性化させる取組

コードにおける校長の具体的な取組について、3-(2)-イ「クラスター分析」で示した特徴語を含む段落を中心に、校長の発言の一部をテキストから引用する。

取組1 方針の提示

- ・総合的な学習の時間、極端なことを言えば、そこが学校の独自性、特色を出せるいわゆる領域ですよ。……これを利用しない手はないだろうと。こんなふうな形で4月の経営方針のときに、総合的な学習の時間というふうな形でやらせていただいたのが〇〇(新任校)のスタートです。
- ・育てる力を明確にする……やはり若干自分でもバージョンアップした部分はありますが、

これはとにかく行った年の方針です。

取組2 進捗状況の管理

- ・(担当教員)一人一人に……意思決定させようっていうふうな方向は(年度の)最初に確認して、夏休み確認し、この前も確認して、そういう方向で取り組んでいますね。
- ・あそこまでよくやったなと思って。地域の方からもものすごい評価を受けましたし、あのマップを作ったのは学年部としてすごく面白いことをやったし、もう褒めましたし。

取組3 研究指導

- ・私の思っていることを、更に研究主任がかみ砕いた言葉で職員に伝えてくれたものですから。私が、校長がトップダウンでやろうぜって言っても……「ふーん」っていうのが一般的なんだけど、ミドルリーダーが言うとなんか違うかなっていうのがあります。
- ・私の買ったファシリテーション関係の本をぼんっと教務室の片隅に置いて、こういうふうなこと書かれている本があるから、暇があったら見てくださいねと。
- ・すごく一生懸命なメンバーなので、案を、考えを持っては私の所へ来て、これで、こんな関連で今考えているんですけどって言った段階で、じゃあそれで子どもがどういうふうに考えるのみたいな話をしてると、また考えてきますみたいな。そういうのが相当その2年部は続きましたね。
- ・たまに授業に入っていて、で、核となる先生のところではそっとういう。そっこのほうがいいです。あんまり表立ってやると結構プレッシャーもかかるでしょうし。

取組4 地域との関係構築

- ・日常からの地域との活動って大事だろうなっていうのは先生方に言いました。生徒会の子どもたちにも言って。
- ・完全にその(祭りのある)日は部活なしっていうことは、これ決定しました。……地域の方がやっぱりありがたいがられるんですよね。子どもたちもありがたい……やっぱり予想どおりの状況が起こってきた。
- ・総合から更に発展して、いわゆる授業も公開

して地域の方から意見をもらうようにして(います)。職員は地域(の住民が)1人でも2人でも来ると緊張してやったり、張り切ってやりますので、ますます相乗効果としていい学校運営ができるんだらうなっていうふうな方向で今やっています。

- ・私(校長)とか〇〇(ミドルリーダー教員)がいなくなったときに……せっかく地域連携で進めているのに地域が今度はそっぽを向かれると駄目ですので、「〇〇未来プロジェクト10」という10年スパンを続けようっていうふうにつまみちました。

取組5 取組の組織化

- ・どういう組織にするかっていうのは、校長としてイニシアチブを取ったということ。予算のほうもここはじゃあ重点的に買いましょとか……。あとは、単年度じゃなくて(複数年度)できるように人材的に、研究主任は1年目は2年生(の担任)で、2年目は3年生になるけれども1年生を見てもらって……。
- ・外とつなげられればいいと思うんですけども、そこはコーディネーターとか、そういう方が学校に配置されている時代にならないとなかなか大変なんかなど。そうじゃないと、結局は職員にやってもらうにはまた過剰負担になりますし、管理職がやる。

取組6 計画の立案

- ・(計画が)ないまま手探りでやっていった、正直。でも、さすがに……年間計画、指導計画ができていないと、特に目指す子どもの姿とか、資質・能力ですよ……それを明確にしないと駄目だろうというので、1年目の後半……新年度を迎えるに当たってみたいな形で形にしていってのがあれ(計画)ですね。
- ・(地域住民を対象としたアンケートの)原案は(校長が)作り、そして集約し、それをああでもない、こうでもないKJ法で(まとめました)。※前掲

ウ. ミドルリーダー教員の役割と取組

A. 総合的な学習を活性化させるための役割

総合的な学習を活性化させるためのミドルリーダー教員の役割を6つ、仮説的にコードとして

表5 コーディングルール（ミドルリーダー教員）

コード	抽出語
地域との連携・協働	地域, 行く, 聞く, 考える, 分かる, 本当に, 見る, 学校, 行う, 生徒, 自分たち, 課題, 来る, お話, 将来, 頂く, 実践, 地域協力コーディネーター, 地域コーディネーター, 連携
総合的学習の実践	総合, 実践, 子ども, 学習, 職場, 体験, 個人テーマ, 発表, 教科, テーマ, 作る, 授業, 生徒, 子どもたち, 工夫, 防災意識, 担任, 活動, 頑張る
同僚教員の啓発	前, 担当, 研究主任, 先生方, お願い, 各学年, 総合担当, 当時, 大変, 意味, 会議, 取りあえず, 指定, 意識, 変える, 話し合う, 最初, 学校全体, リーダースhip, 提案
合意形成・調整	話し合い, 相談, 意見, ファシリテーション, 下ろす, 学年主任, 職員, 校長先生, 学年担当, 提供, 率直, 和む, 押す, 生徒指導, 冗談, 些細, ばか話, 出し合う, 進路, 固める, 生徒理解, 情報, 企画, 組み直す, 毎日, 主任, 担任, 笑う, 合意, 連絡, 調整
計画の立案	一応, 個別, 載る, リセット, 計画, 指導計画, 教育計画, 課題, 反省, 同じ, 時数, 考え, 今年, 案, 見直す, 立てる, 形, 作る

設定した。そして、コードを構成する抽出語を「or」で連結して、コーディングルールを作成した（表5）。

その際、クラスター分析において段落数が少なかった①と③については、次のように取り扱った。

①については、「地域コーディネーターさんが大変動いていただいて（ゲストティーチャーと）連絡取りながらやりました」「地域と学校とをつなぐ一環として総合学習があって……それを着実に受け継ぎながら実践していく」という発話があるように、地域と連携・協働しながら総合的学習を実践したことを示していた。これは、④地域・総合などに関連する取組を示していることから、①は④に取り込んで仮説化することにした。

③については、「総合の年間指導計画が非常にぼわーっとした感じだったので、2学期いっぱいぐらいまでのある程度の目安と計画は立ててみました」「1年生から時数とやる内容を……徹底して見直して」という発話があるように、総合的学習の計画を見直したことを示していた。これは、総合的学習を推進するミドルリーダー教員の役割として重要であることから、仮説として残すことにした。

次に、前述した校長と同様にしてテキストを

表6 コードの集計結果（ミドルリーダー教員）

コード	頻度	%
地域との連携・協働	205	31.0
総合的学習の実践	182	27.4
同僚教員の啓発	160	24.1
合意形成・調整	102	15.3
計画の立案	75	11.3
コード無し	308	46.3

単純集計した結果を表6に示す。「地域との連携・協働」「総合的学習の実践」がそれぞれ3割前後、「同僚教員の啓発」が2割強の頻度で出現していた。総合的学習を実際に指導する立場として、同学習に対する同僚教員の理解を促しつつ、地域と連携・協働しながら教育実践する役割を担っていた。

なお、「コード無し」の段落が、クラスター分析で分類されなかった段落を14.7%上回る結果となった。

B. 総合的学習を活性化させる取組

コードにおけるミドルリーダー教員の具体的な取組について、発話の一部をテキストから引用する。

取組1 地域との連携・協働

・地域のコミュニティーセンターに行って、中学校は今後どういうふう（地域と）関わっ

ていけばいいかっていうのを……3回ぐらい2時間ぐらい話したかな。……地域のことを考えているコミセンの方と話して、そのコミセンの地域としてのニーズっていうのをまず聞きましたね。

- ・地域コーディネーターさんが大変動いていたので、そちらの方と連絡取りながらやりました。
- ・私も分会長さんたちの集まりっていいですか会議があったので、そこに顔を出して、今年と来年こういうのをやるので、是非ご協力をまたお願いしますみたいなお話は……校長先生と行ったのかな、行ってお話をしたことは去年、おとしやりましたよね。

取組2 総合的学習の実践

- ・常に何か新しいものに寄りすぎたり、(研究推進部と学年部を)行き来してやってみる、(やってみると)できない、(研究推進部に)戻す、またこっち(学年部)でじゃあこうやってみればいい、分かりました(私が) 頑張るみたいな。
- ・(大切なことは)学年部全員でやるってことです。……担任じゃない副任が普通に上がってやるってこともありますんで、授業を。……総合は担任がやるもんだっていうのを完全に払拭できたかなと思います。

取組3 同僚教員の啓発

- ・総合だからどの学校も……個人テーマを設定するところがうまくいなくて、(だから)行事っていうか活動ありきの投げやりな総合になっちゃうんじゃないかっていう(私の) 提案の下、やっぱりじゃあみんなで話し合おうよってなったんですね。
- ・この学校はこの内容で総合的な学習の時間をやるんだっていうのが明確じゃないと、やっぱりぶれるかな。……(生徒に)どんな力を付けさせたいか明確になったことがやっぱり良かったんじゃないかなって先生方も思っていると思うんですけど。

取組4 合意形成・調整

- ・先生方だってやりたいことがあるので、今、先生方のニーズがどこにあるかっていうとこ

ろをやっぱり見極めて、うまくファシリテーションで、思考ツールでつないだんですね。

- ・特に1年生と3年生を結び付けるっていうのですごい力を掛けたし、1年生と3年生の先生方にいろいろ相談とか、私と1年生と2年生とか3年生、各学年の担任の人と話し合いをしたりして。

取組5 計画の立案

- ・(計画を)しっかりもう形にしなきゃいけないっていうことで……これは基本的には私と、あとは各学年部にどんなことをやりたいかっていうか、やりましたかってことで打診して。最後に校長先生に見てもらったんですね。結局でも……1人でやりましたね。
- ・指導案とか資料はこっちで作りましたが……一応複数回の指導案検討をやらせてもらっています。
- ・昨年度の反省とか、あとは今年初めてきた先生はどんなようなことをやっているのかなっていうのがすぐ一目で分かるようにこれ(学年別の資料)を作りました。

エ. 役割相互の関連

A. コード間の類似度

これまでに述べてきたコード(総合的学習を活性化させるための役割)について、校長及びミドルリーダー教員それぞれで類似度行列を計算し、コード間の類似度を分析した。

その結果、校長は、取組4「地域との関係構築」と取組6「計画の立案」の間(Jaccard係数0.37)、取組1「方針の提示」と取組2「進捗状況の管理」の間(Jaccard係数0.35)にそれぞれ弱い共起性が認められた。

また、ミドルリーダー教員は、取組1「地域との連携・協働」と取組2「総合的学習の実践」の間に弱い共起性(Jaccard係数0.44)が認められた。

B. コード間の共起性

校長及びミドルリーダー教員それぞれにおけるコード間の共起性を「共起ネットワーク」を用いて示す(校長:図1, ミドルリーダー教員:図2)。

共起ネットワークとは、前述した類似度行列

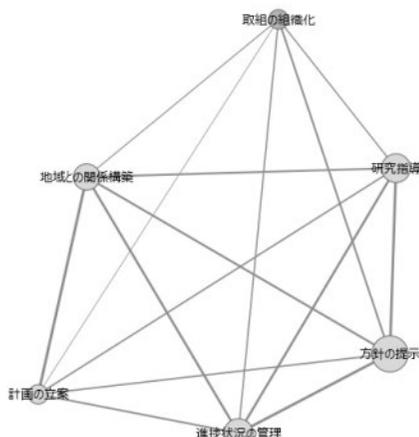


図1 共起ネットワーク（校長）

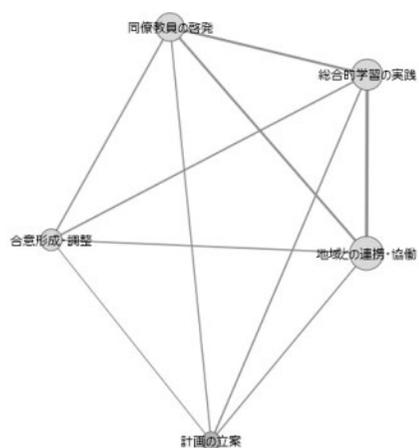


図2 共起ネットワーク（ミドルリーダー教員）

の計算結果を視覚化したものである。KH Coderの作図では、コードに含まれる段落の数は円の大きさに、関連性の強さは軸の太さに対応している。

4. 考察

本研究の目的は、総合的学習を学校全体で推進してきた中学校の校長及びミドルリーダー教員にアプローチし、同学習を活性化させるために担った役割とそこでの具体的な取組を明らかにすることであった。

計量テキスト分析の結果、校長については6つの役割が、ミドルリーダー教員については5つの役割が抽出された。また、それらの役割が

相互に関連し合って総合的学習を活性化させていたことが明らかとなった。

校長及びミドルリーダー教員に共通して見られたのは、「地域との関係構築」（校長）「地域との連携・協働」（ミドルリーダー教員）といった地域との関わりに関する役割であった。また、全体計画、年間指導計画といった「計画の立案」を担う役割も、両者に共通して見られた。そして、とりわけ「地域」に関する役割は、校長においては「計画の立案」との間に、ミドルリーダー教員においては「総合的学習の実践」との間に関連があることが示唆された。

文部科学省（2017）においては、中学校で総合的学習を「充実させるための体制づくり」として、①校内組織の整備、②年間授業時数の確保と弾力的な授業時数の運用、③環境整備、④外部との連携の構築の4つを指摘している。本研究で得られた校長及びミドルリーダー教員に共通して見られた2つの役割は、「地域」については④に、「計画の立案」については①に該当する「体制づくり」の役割である。

そこで、本節では以下、中学校で総合的探究を推進するための汎用的な知見を得ることを目指し、上記2点の具体について先行する文献に照らしながら考察する。

(1) 地域と関係を構築し、連携・協働する

中学校学習指導要領「総合的な学習の時間」では、探究課題の例として「地域や学校の特色に応じた課題」を示すとともに、内容の取扱いに関する配慮事項として「地域の人々の協力も得つつ、全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制について工夫を行うこと」と規定している。研究参加者である校長が「地域」との関係構築に尽力したり、ミドルリーダー教員が「地域」と連携・協働したりしたことは、それらの規定に適う取組である。

また、前述した文部科学省（2017）による④「外部との連携の構築」に関する解説では、配慮すべき事項として「（外部人材との）日常的な関わり」「担当者や組織の設置」「教育資源のリスト（の整備）」「適切な打合せの実施」「学習成果の発信」の5つを示している。実際に本

研究で研究対象となった中学校では、地域の祭りがある日は部活動を中止にして生徒が祭りに参加できるようにしたり、コミュニティセンターの職員と打合せを重ねたり、地域住民に授業を公開したりしていた。

その一方で、5つのうち「担当者や組織の設置」については、実際の運用場面において学校間で違いが見られた。文部科学省(2017)においては、「副校長や教頭、教務主任などが地域連携の中心を担うだけでなく、地域連携の中核を担う教師を校内組織に位置付けることも考えられる」と示している。そして、研究対象となった中学校の中には、地域コーディネーターなどの専門職員を配置したり、総合的学習を担当するミドルリーダー教員を「地域連携担当」などの校務分掌に充てたりしている学校も見られた。しかしながら、地域コーディネーターなどの専門職員が配置されていない学校では、「職員にやってもらうにはまた負担過剰になりますし、管理職が(地域コーディネーターを)やる」(校長・前掲)という発話に見られるように、教員の業務量との兼ね合いから、地域との関係構築や連携・協働を組織的に行いにくい状況にあることが示唆された。

この点については、岩崎(2018)が小・中・中等・特別支援学校で総合的学習を担当するミドルリーダー教員を対象に行ったアンケート調査においても同様の結果が示されている。それによると、回答が得られた361校のうち4割近い学校には専門職員やボランティアが配置されておらず、7割近いミドルリーダー教員が「教職員が多忙で、地域との連携・協働に割く時間やエネルギーが確保できない」ことを課題として回答していた。

地域と関係を構築し連携・協働することは、総合的学習を活性化させる要件である。その要件を満たすためには、形式的にはなく実質的に「関係を構築し連携・協働する」人材を地域だけでなく学校にも配置して、専門性を高めていくことが求められる。

(2) 総合的学習の計画を明確にする

文部科学省(2017)による①「校内推進体制

の整備」に関する解説では、「校長の方針に基づき、総合的な学習の時間が達成できるように、全教職員が協力して全体計画及び各学年の年間指導計画、単元計画などを作成し……校内推進体制を整える必要がある」と示している。実際に本研究で研究対象となった多くの中学校では、総合的学習の計画が十分に整備されていなかった。そうした状況を捉え、校長が「方針の提示」や「研究指導」を行い、ミドルリーダー教員が各学年と「合意形成・調整」を行いながら「計画の立案」に携わっていた。

その際、研究に参加した全てのミドルリーダー教員は、全体計画や年間指導計画といった学校全体に関わる計画の作成に、原案の段階から直接、関わっていた。また、単元レベルの計画についても、各学年で総合的学習を担当している同僚教員の相談にのったり、自らが案を作成したりしていた。

校長が提示する方針に沿って総合的学習の計画することは、新しい学習指導要領が打ち出しているカリキュラムマネジメントの具体として位置付けることができる。その際、校長の「方針」を同僚教員が「計画」に具体化するに当たっては、ミドルリーダー教員には校内において指導的役割を担うことが期待されている。

曾我(2017)は、総合的学習を推進するリーダーが行っている同僚教員への「指導、助言」の様相を、中・高等学校の教員を対象としたアンケート調査の分析に基づいて考察している。具体的には、中学校の総合的学習に関しては指導や助言がやや「控えめ」に行われていることや、方針を「共通理解」するための助言には「地域との情報共有化のための組織(システム)が必要」になる。曾我によるこれらの指摘は、本研究でのミドルリーダー教員が、総合的学習の推進に向けた「計画の立案」を「合意形成・調整」や「地域と学校の関係構築」との関連において行っていたことと並行するものである。

その一方で、校長においてはスタンスの違いが見られた。すなわち、自ら原案を作成するスタンス、総合的学習主任や研究主任といったミドルリーダー教員に自らのアイデアを伝えて文

章化させるスタンス、ミドルリーダー教員の提案を待つスタンスといった違いである。この点については、学校の規模や組織文化、教員の年齢構成等によって校長が選択するスタンスも変わってくるのが考えられるので、総合的学習を活性化させるという観点からの是非を一律に論じることはできない。

しかしながら、研究参加者の校長は全て、総合的学習を教育課程の柱に据えて学校をマネジメントしようとする「スタンス」において共通していた。このことは、総合的学習の「計画」を明確化させることで自らの「方針」の理解を教員に促したと考察することができる。そして、その「スタンス」は、単に総合的学習を活性化させるための校長の役割に留まらず、学校経営上のストラテジーとして捉えることができる。

(3) 研究の限界

研究参加者について、校長もミドルリーダー教員も5人ずつという限られた人数であった。

また、同一校に勤務していた校長及びミドルリーダー教員は2組であり、それ以外は異なる学校での異なる取組をインタビューする形となった。そのため、総合的学習を学校全体で推進する際に校長及びミドルリーダー教員が連携・協働して行った取組は何かについて、計量テキスト分析で明らかにすることができなかった。

更に、仮説検証的な分析において、コードに含まれない段落が校長で4割弱、ミドルリーダー教員で4割強残った。コードの数を増やしたり、コードを構成する抽出語を調整したりして、総合的学習を推進した際に担った校長及びミドルリーダー教員の役割を多角的に分析する必要がある。

5. 結論

中学校の総合的学習を活性化させる校長及びミドルリーダー教員の役割は、次の通りであった。

校長は、方針の提示、進捗状況の管理、研究指導、地域との関係構築、取組の組織化、計画の立案の6つであった。

ミドルリーダー教員は、地域との連携・協働、総合的学習の実践、同僚教員の啓発、合意形成・調整、計画の立案の5つであった。

総合的学習を学校全体で推進するに当たっては、校長もミドルリーダー教員も地域との関係構築や連携・協働に尽力するとともに、校長の示した方針に基づいて関係する教員と協議しながら同学習の計画を明確化していた。

文献

- 岩崎保之 (2018) 「総合的な学習の時間」活性化に向けた学校と地域との連携・協働に関する調査研究『新潟青陵学会誌』11 (1), pp. 24-34.
- 牛澤賢二 (2018) 『やってみようテキストマイニング—自由回答アンケートの分析に挑戦!—』朝倉書店, p. 91.
- 曾我悦子 (2017) 「総合的な学習のカリキュラムマネジメントに関する実証的研究—中学校・高等学校におけるカリキュラムの連関性とそれを支えるマネジメントの協働性との条件に関する考察—」『せいかつ&そうごう』24, pp. 44-53.
- 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」文部科学省, p. 236.
- 中野修一 (2019) 「中学校における『総合的な学習の時間』の取組の課題について—探究的な学びの実現を目指す取組の在り方—」『神奈川大学心理・教育研究論集』45, pp. 177-193.
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一 (2015) 「KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル」KH Coder 付属文書, p. 31.
- 樋口耕一 (2019) 「計量テキスト分析における対応分析の活用—同時布置の仕組みと読み取り方を中心に—」『コンピュータ&エデュケーション』47, p. 18.
- 文部科学省 (2017) 『中等学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 総合的な探究の時間編』文部科学省, pp. 3-4, pp. 125-142.

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP18K02551の助成を受けたものです。インタビューにご協力を頂いた各位に感謝申し上げます。